

出会いこそ、生きる力

俳優 サヘル・ローズ

「砂浜に咲く薔薇」

これは私の名前サヘル・ローズを日本語に訳した意味です。この名前をつけてくれた女性は育ての母（養母）です。私の生みの親がどんな名前をつけてくれたのか、生年月日はいつだったのか、何も残っていない。なぜなら、私が生まれた時代は、母国であるイランと隣国のイラクが戦争していた最中だったからです。だから私みたいに、故郷も名前も、生年月日も知らない子どもが、今もこの世界中で大勢います。

そんな中、私は4歳から7歳を孤児院で生活しました。衣食住はありましたが、残念ながら施設生活の中で「心が動いた形跡がない」。正確には、生まれた時から養母と出会った7歳までは「心の貧困状態」でした。今は大人になっていますが、心の中には小さなインナーチャイルドが宿っています。それも現在進行形ですね。子どもに必要なのは、おもちゃでも、洋服でもなく、1対1の関係性から生まれるまなざし。その「誰かの瞳に映る」ことがとても重要なことです。今、振り返ってみても、私はとても運に恵まれた子どもだったと思います。それは「出

会い」と「ひと」の運。7歳の時に養母と出会って養子縁組。そしていろいろなご縁と養母の思いもあって、1993年に日本へ。

頼っていた方の家を数カ月後には出ていかなければならなくなり、身寄りも友人もない日本で路頭に迷い、養母との公園暮らしが2週間続いた。この時の出会いが本当にすてきで。おなか为空いて、よくスーパールの試食コーナーに行った。その時に試食スタッフのお母さんがご飯を恵んでくれたり、小学校の給食のおばちゃん私が私たち親子に声を掛けてくれて、自分の家に住まわせてくれた。そう、書ききれないほどの「おせっかい」に救われた親子です。いい出会いもあれば、中学時代はイジメがひどく、3年間、養母にも学校での出来事を言えず、いつも養母の前では「優等生のサヘルちゃん」を演じていた。それも限界が来てある日、死にたくなって学校を早退した。だけど家には養母がいた。そこで見たのは、私が見たことのない、弱りきった養母。強がって生きていた養母が、私のない所では泣いていた。この日の出来事がなかったら、私たちは「心から親子」にはなれ

なかった。血はつながっていない親子だが、誰よりも愛しています。養母フローラを。

「アナタがつけてくれた名前に恥じない生き方をする」。そんな思いを胸に今、子どもや大人、難民となってしまった方々のサポートを個人的にしています。「優しいおせっかい」を広めるために。

Profile

1985年イラン生まれ。8歳で来日。日本語を小学校の校長先生から学ぶ。舞台『恭しき娼婦』では主演を務め、主演映画『冷たい床』では、ミラノ国際映画祭で最優秀主演女優賞を受賞するなど、映画や舞台・俳優としても活動の幅を広げている。また、第9回若者力大賞を受賞。国際人権団体NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動では親善大使を務めた。個人的にも支援活動を行っており、2020年にはアメリカで人権活動家賞も受賞。

